

[平成10年度特別奨励研究報告]

シーンとキーワードによる景観分類

—日本人の原景観(1)—

黒川 威人

1. はじめに

日本の各地で都市化が進み、地域特性のある景観は近年急速に消滅しつつあるが、それとともに、もともとの景観がどのようなものであったのかの記憶もうすれつつある。400年以上戦火に見舞われたことのない金沢といえどもそれは例外ではないが、そもそも日本人の感性を養って来たと考えられる風景は、どのようなものであり、今日ではどのように変化しているのだろうか。筆者はこれを原景観と名付けてその構造を明らかにすべく研究を開始した。

本研究は地域固有の景観を記録に留め、人と景観との関係について考察し、主に視覚情報としてのその特性を分析することで、今後の町並みや景観のデザインに手掛かりを与えようとするものである。

2. 研究方法

2.1. 用語の定義

景観という言葉は最近非常に多く使われるようになって来たが、その使われ方は用途によって、専門分野によって大きく異なっている。以下に本論で使用する「景観」に関し基本的な用語を整理しておく。

2.1.1. 景観と風景

一般的に「景観」に代わる言葉として使われるのが「風景」であろう。これらの言葉が意味するところは、それほど異なる訳ではないが、前者はどちらかと言えば、眼前の物理的な操作可能なものであるにたいして、後者は操作対象と言うよりは「心象風景」と言う使い方に見られるように、文学的表現に使用されることが多い。筆者らの研究の目的とするところは、現実の町並景観等をデザインする際に役立てようとするものなので、「景観」を用いている。なお最近では全国の自治体が景観条例を制定している

が、兵庫県の「環境の保全と創造に関する条例」では「景観」と「風景」を次のように使い分けているのが注目される。「前者はどちらかといえば町並みに関する景観であり、後者は田園や山岳、海など、より広い範囲の景観を指している。」¹。また土木工学の竹林征三やランドスケープの進士五十八らは「景観十年、風景百年、風土千年」という考えを示している²。

2.1.2. 景観の種類

(1) 景観デザイン研究会(篠原修ら)によれば、景観操作の直接対象として、それぞれ固有の課題を有する空間を個別に見た場合、次のような6つの分類が成り立つとしている。

- 1) 「自然景観・田園景観」
- 2) 「都市景観」
- 3) 「道路景観・街路景観」
- 4) 「河川景観」
- 5) 「港湾景観」
- 6) 「巨大構造物景観」

ただし、これらは別々に成立するという訳でもなさそうである。例えば都市内外の河川や山岳が都市景観(スケールを絞れば町並み景観)を特色付けることもあり、道路景観や港湾景観が町並み景観と一体となって魅力をかもし出している場合などがあるからである。また巨大な建築物や、土木構築物はしばしば周囲の景観の中心的存在となる。そのような場合、構造物とその周辺が織り成す景観を特に橋梁景観、ダム景観などと呼んでいる³。

(2) 上記とは別に、景観は人間の心理や、心的現象によって分類することが可能である。

天野(前掲書)によれば、デザインする立場に立てば、時間の長短、視点の重要性によって、現象的には以下の4類型に分類できる。

- 1) シーン景観 景観といったときに、始めに思

い浮かぶのが写真のような眺めであろう。すなわち視点が固定されて透視図的な眺めであり、時間的には比較的短時間のものである。

2) シークエンス景観 視点を移動させながら、例えば歩きながら、もしくは車を運転しながら、次々と移り変わって行くシーン(場面)を継起的に体験して行く場合の眺めである。時間的には長くはなく、景観の変化は視点の移動による。

3) 場の景観 シーン景観、シークエンス景観の場合、視点の移動や、その移動のルートが重要な意味を持っているが、それらの体験が総合されてある一定範囲の景観の特徴を論ずる場合、「場」の景観という言葉を使う。「京都の都市景観」とか「尾瀬の景観」というような場合である。このような場合、景観は限られた視点からの眺めではなく、一定の範囲の複数の不特定の視点からの眺めの総体を意味している。

4) 変遷景観 長い時間の経過に伴って、対象そのものが変化し、景観が変わって行く場合、これを変遷景観と呼ぶ。自然石などが年齢を経ることによってなじんでくるエージングや、植物の成長などの自然の力の他、建築物の建て替えや住まい方の変化、開発行為などの人間の力などによる。時間的に長いスパンでの景観計画上、大きな課題である⁴。

(3) その他の分類

建築家、芦原義信氏は景観を次のような分類が可能だと考えている。則ち、「内から眺める景観」、「外から眺める景観」で、これは西欧の家と日本の家のつくりに着目し、西欧のそれが壁の建築であるに対し、日本のそれは床の建築であるとの観点から論じられている。すなわち、壁面によって外部の自然と画然と仕切られる西欧の建築では、内部は内部で一つの完成した空間があり、それは部屋ごとに独立している。これに対し日本の家屋の場合は柱梁構造であるため、外部の自然との境が明瞭ではない。柱と柱の間にある戸を開け放せば縁側越しにそのまま庭へと続いてしまう。従って、日本の庭園は内から眺める景観が主流なのであり、西欧の場合は庭は

庭で回遊しながら眺める場であって、建物の中との関係が意識されることはない、とするものである。和辻哲郎が「風土」でのべた、日本人の「うち」「そと」感とも相通じるものである⁵。

以上はこれまでの研究に見られる景観の分類であるが、本研究ではシーン景観としての写真を使用することだけを共通の条件に進めた。本研究の結果によってあらたに規定して行きたいと考えている。

2.2. サンプル収集と評定実験

2.2.1 研究メンバーの構成とデータ収集

研究を始めるに当たっては、日本デザイン学会の環境デザイン部会誌を通じて共同研究を呼び掛け、応募してくれた全国にまたがる7人の研究者のほか、直接依頼した研究者4人と筆者による12名の研究グループを結成した(表7)。各研究者には同一条件で資料の収集を依頼、即ち、各々が「原景観」と感じる場所を写真撮影、これをデータシートに貼付すると共に、撮影場所等のデータとコメントを付けて筆者のもとへ回収することとした。

2.2.2 データベース化

日本各地の共同研究者から得られた167枚の景観写真と、これにともなう撮影場所やコメントを記入した上記データシートはコンピュータに取込み(アドビ社ファイルメーカー)、キーワードを書き込む欄を作成し、データベースとした。これを全研究者に複製して配付することとしたが、これにより、収集者、場所などの項目別に検索が可能となった。

2.2.3 キーワードによる評定

上記データベースをMOディスクにコピーし全ての研究者へ送付、全ての写真を一枚ずつ観察して、思い浮かんだキーワードを5個以下で記入してもらった。

2.2.4 キーワードによる分類・考察

上記によって得られたデータベースのキーワードは一つのアプリケーションに統合し、全体としてどのようなワードが多かったかの出現頻度による分類やキーワードの組み合わせによる各フレームのタイプ分けを行なうこととした。現在までのところ4名の共同研究者と1名の協力者によるキーワードが回収

されただけなので、本稿ではこの5名から得られたデータに関してKJ法（川喜田二郎氏による）による分類と分析を行っている。

3. 研究結果

以下にキーワード（以下ワード）を分類・分析した結果についてのべる。なお以降ワードの記入者を「評定者」と呼ぶ。

3.1. 個人別キーワードの出現頻度

回答のあった4名と協力者の1名を加え、5名の評定者について検討してみた。これは評定者の出身地、在住場所、年齢、職業など、パーソナリティが全く異なるので、個体ごとにどのような傾向・個人差があるかを調べるためである。この結果の一覧は表1～5の通りであるが、各ワードの後ろの数字は、評定者ごとのワードの出現頻度である。なお、当初は10ワードで開始したが、下位のワードのほうがむしろ細かな情報が得られることに気づき、13日まで抽出・カウントすることとした。

ここで判明したことは、個々の評定者によって使用される語彙が予想以上に異なることであった。同じことを意味しているようだが表現が違う場合と、答え方のレベルが異なる場合があり、後者は細かな部分の観察によっている評定者と、見えているものを読み取った上でこれを独自に解釈し、ある価値判断に基づいて分類を行ったかに見える評定者とがある。これらは評定者に対する前提条件の説明にかなりの注意を払う必要性を示唆している。

以下詳細に個人差について検討してみたい。一例として「緑」に対する反応を見てみよう。

評定車 Y は第2位に「緑」があるほか、それに類するものとして13位に「林」がある。

また評定車 H は「緑」は5位ながら2位に「樹木」があり、9位には「樹林」が、さらに13位には「草花」まであって、より多く緑に関する要素に感応していることがわかる。

逆に評定車 N はこれに類するワードとしては第3位に「自然景観」があるのみである。これは興味

の対象が自然物の細かな内容には向いていないということであると思われる。また、この評定者の場合はワードのバリエーションが少なく、あらかじめ自分で決めた分類をサンプルに当てはめて行ったのではないかと思われる節がある。今回の目的とする研究に対しては余り役立っていないといえる。

評定車 YM の場合は第4位に「緑陰」があり第1位には「木立」、第10位には「草花」があって非常に鋭敏に自然景観を見ていることが分かる。この評定者の場合はさらに他の評定者にはみられない「陽光」、「霞」といった表現も多くみられ（各2位、12位）豊かな表情を読み取ろうとしているのが注目される。ただし、この評定者のみに見られる「求心性」は抽象性が強く一覧表では使用できなかった。

以上、「緑」にかんするワードだけを見ても評定者の反応は非常にまちまちであることが分かる。この5人に関して言えば出身地や在住地がかなり影響しているように思われる。また、サンプル景観に興味があるか否かによって情報の密度は異なるように思われる。たとえば、「道」についていえば、「小道」や「細い道」「人が踏み分けてできた道」などはどのような「道」を指すのか明瞭であるのに対し、単に「道」としたものは内容が分りづらい。この点「石畳」等はテクスチャにまで言及しているため情景が見えてくる。

「田園」「田畑」等の記述も、それが「田」つまり「水田」なのか「畑」なのか、それが混在しているのかなどが分る記述がほしいところである。KJ法では「土の匂いのする情報」を重要としているが、同様のことが指摘される。

なお、以上の事からは評定者にワードの付与を依頼する際、事前に基礎的な情報として、分類レベルを指定するなどの方法が考えられる。その他様々なことが考えられるが、評定サンプルがごく少数であるため、これ以上の言及は避けたい。

ただし、SD法のようなあらかじめワードの対になったものを与えて、その評価尺度を求める手法にかけ前の予備的な実験としては大いに意味があると思われる。

表1. 評定者N (東京都世田谷区在住)

1.	伝統的住居13
1.	川13 (川5、多目的小河川2、どぶ川2、生活小河川、伝統的生活水路、用水、山川各1)
3.	自然景観12
3.	伝統的集形態12 (伝統的集形態7 伝統的集落4 伝統的集落景観1)
3.	聖なる場12 (聖なる場10 聖の場2)
6.	伝統的生活態11
7.	町屋10 (町屋7 伝統的町屋3)
8.	伝統的習俗7
9.	伝統的街路6
9.	近代化の負景観6
9.	伝統的生活遺産6 (伝統的習俗遺産4 伝統的生活遺産2)
12.	近代の景観6 (近代の景観3、繁華街の夜景2、都会のビル街1)
13.	伝統的産業景観5 (伝統的産業景観3、伝統的産業態2)

表2. 評定者Y (富山市在住)

1.	水辺29 (水辺8 小川6 河川風景4 せせらぎ5、ため池4、池1、水郷1)
2.	緑23
3.	信仰22 (信仰15、参道7)
4.	木造建築21
5.	農村生活17
5.	田園17 (田園6、田園風景3、水田3、田んぼ3、棚田2)
7.	瓦屋根15
8.	白壁13
9.	山並12
10.	茅葺き屋根10
10.	石畳10 (石敷き7 石畳3)
12.	街並9 (街並8 沿道の街並1)
13.	林8 (林3、竹林2、社叢林1、屋敷林1、雑木林1)

表3. 評定者H (石川県羽咋郡在住)

1.	田園19 (田4、休耕田1、棚田2、稲刈り後の田3、田園2、田園の陽の部分と陰の部分、区画のされていない田、かかし、はさ、稲、わら、畦道各1)
2.	樹木16 (松4、樹木3、大樹2、街路樹、巨木、太い幹、木の幹、枯れ木、桜、枝垂れ柳各1)
3.	瓦15 (瓦6 瓦屋根8 瓦屋根の団地1)
4.	小道14 (小道6、細い道2、路地2、人が踏み分けて出来た道、生活に必要な巾の道、曲がりくねった道、山へ続く道各1)
5.	緑13 (緑12 深い緑1) 6. 樹林12 (樹林8 雑木林 針葉樹林、竹林、木々各1)

表4. 評定者YM (大阪市天王寺区在住)

1.	木立36 (木立24 樹林10 雑木林1 竹林1)
2.	陽光25 (陽光24 朝日1)
3.	山並み24
4.	緑陰22 (緑陰9 緑樹4 庭木3 植え込み 玄関の松下がり松 松 柳 銀杏各1)
5.	白壁19 (白壁16なまこ壁3)
6.	屋根18 (大屋根12 瓦屋根 トタン屋根 屋根 陣屋根 いらか 寄せ棟各1)
7.	求心性17 (求心性16 中心性1)
8.	水辺16 (親水4 水路4 水3 河・河川3 水面2)
9.	畑12 (畑11 畑地1)
10.	石畳11 (石畳10 石たたき1)
10.	草花11 (草花9 朝顔2)
12.	霞9
13.	格子8 (格子5、面格子3)

表5. 評定者F (西宮市在住)

1.	町並み34 街並み4
2.	山並み25
2.	植栽25
4.	植生23
5.	軸組22
6.	田園19 (田畑6、田園4、田4、棚田2、畑2、水田1)
7.	里山18
8.	アスファルト15
8.	道15 (道14 山間道1)
10.	山間14 (山間13 山間部1)
11.	寺社13 (神社7 寺、寺院6)
12.	集落12
13.	川11 (川9、川面2)

表6. ベスト13総合一覧表

大分類語	第3分類語	第2分類語	第1分類語 (数字は出現頻度数)
日本人の原景観	自然景観 355	緑 36	緑 35 深い緑 1
		緑陰 13	緑陰 9 緑樹 4
		木立 56	木立24 樹林18 竹林4 雑木林3 林3 社叢林1 屋敷林1 針葉樹林1 木々1
		樹木 24	松5 樹木3 大樹2 巨木、太い幹、木の幹、枯れ木、桜、枝垂れ柳、柳、銀杏、下がり松
		植栽 30	植栽25 庭木3 植え込み1 街路樹1
		植生 38	植生23 草花15
	山並み61		
	河川風景97	水辺 44	水辺8 親水4 水3 水面2 川べり1 せせらぎ5 水郷1 ため池4 池1
		河川 45	川20 小川7 川6 河川風景4 河・河川3多目的小河川2 生活小河川1 川面1 山川1
		水路 8	水路4 どぶ川2 用水1 伝統的生活水路1
人里景観 208	里山35		里山18 山間13 山間部、山間道、山へ続く道、人が踏み分けてできた道
	田園風景133	田畑 18	畑11 田畑6 畑地1
		田園 48	田園12 田8 棚田6 水田4 田園風景3 田んぼ3 休耕田2 稲刈り後の田3 田園の陽の部分と陰の部分、区画のされていない田、かかし、はさ、稲、わら、畦道各1
		集落 67	農村生活17 伝統的習俗7 伝統的集形態7 伝統的集落4 伝統的集落景観1 集落12 茅葺き屋根10 茅葺きの屋根8 茅葺きの門1
信仰の場40		信仰15 整なる場10 神社7 寺・寺院6 聖の場2	
陽光34			陽光24 朝日1 霞9
町並景観 238	町並み158	木造建築 66	木造建築21 軸組22 伝統的住居13
			白壁38 なまこ壁5
			格子15 面格子4 細い格子1
			大屋根12 屋根、トタン屋根、陣屋根、寄せ棟
			町屋7 伝統的町家3
	瓦屋根 30	瓦屋根24 瓦6 瓦屋根の団地1 いらか1	
	町並み 62	町(街)並み46 沿道の街並1 看板8 外灯7	
道68	伝統的街路 27	石畳13、石敷7、伝統的街路6、石たたき1	
	小道 12	小道6 細い道2 路地2 生活に必要な中の道、曲がりくねった道、	
	道 29	道14 アスファルト15	
近代の景観12			近代の景観3 繁華街の夜景2 都会のビル街 近代化の負景観6

3.2. ベスト13総合一覧表

次に5人の評定者のベスト13を合計し、平均的な上位ワードを抽出すべく、再度ワードを切り離しKJ法の要領でマップを作成した。各被験者によって同一内容を表現するのに異なる用語を使っていると思われる内容に関しては、より上位概念の囲い込みを進める段階で統合を進めた。なお、個々の評定者のベスト13を選ぶ段階でグループ化したワード、すなわち括弧で括った語彙は、この段階では再びバラバラにして再判断をしているため、必ずしも個々の評定者の分類とは一致しない。

KJマップはワードの配置による相互関係を見るには適しているが、出現頻度という定量的なデータを読み取るには適していない。そこで、この結果を数値としても把握するため下位から上位概念迄の全てのワードをツリー状に並べ替え一覧表を作成した。

ここに表れた数値は、5人の評定者によるものではあるが、12人の研究者が集めた128枚のサンプル写真に対して同じ条件で観察した結果、反応が多かったワードを示しており、それはとりもなおさず、撮影者および評定者が同一、アングルで被写体を見「原景観」であると感じていた要素とみなすことができよう。従って、これを読み解くことで日本人の原景観についてのおおまかなパターンが把握できるのではないかと考えた。(表6参照)

以下に一覧表から読み取れた結果を記す。

3.2.1. 大分類

大分類から見て行くと、自然景観が最も多く355語に及ぶ。これは全835語の42.5%に当たる。次いで多いのは「町並景観」「人里景観」の順であり、それぞれ223語(26.7%) 201語(24.1%)となる。ただし、第2分類を見てみると町並景観のなかには「木造建築」が含まれているので、この中の何割かは人里景観の中の木造建築かも知れず、とすれば、この両者の数値に差はほとんど無いと言える。いずれにせよ評定者の原景観には自然景観が大きな比重を占めているといえる。

以上の3分類のどこにも含まれない、(あるいはいずれにも含まれる)ものとして「陽光」25(3%)

がある。また他に、どこにも含まれない「求心性」のような抽象性の強いワードがあったが、これはそれぞれ特定の評定者にのみ使用されている語彙であり、他の回答者との類似性が希薄なため、表には掲載しなかった。

3.2.2. 第3分類

以下その内容を見てみよう。

まず自然景観では「緑」の197が断然多い。これは自然景観全体の55%強を占める。ついで河川風景が97(27%)「山並」の61(17%)となる。

緑は自然の代名詞のようになっているが、原景観には欠かせないものであることが分かる。気候温暖で多雨な日本の場合これは予想通りの傾向と言える。ただし季節によっては「紅葉」が多くなると思われる。事実ベスト13には入らなかったが一定数の出現頻度が見られた。

緑は天然のダムといわれるように保水効果があるが、高山では冬期の積雪が夏まで残り、これが雨水と相まって滝となり、渓谷美を形成し、最後は故郷の田野をうるおす。そこは米などの食糧生産の場であると同時にトンボやホタルやどじょう、フナなどの生息地であり、子供達の遊びの空間でもあった。「河川風景」はそれらを総称している。一方「山並」はその水流のはるかな源の峰を指している。細長い日本列島は、その狭隘な巾のわりに脊梁には必ず山岳を持っている。したがって日本では屋外で山並の見えない所の方が少ない。里山との違いは、はるか遠くに見える、あるいは建物などの背景をなす、という意味であろう。「原景観」と感じるのは、町並みであればアイストップとして、それ以外の場合でもはるかに山並が見えることがおおきな条件となるようだ。

小学校唱歌の「ふるさと」に歌われた、川が流れていて緑があり、山並が見える、というのが典型的な1つのスタイルであるといえる(図1~3)。

「人里景観」ではどうか。「田園風景」が166(82.6%)、「里山」が35(17.4%)、「信仰の場」が40(19.2%)だが、これは水田耕作を主体とする日本の風景の本質を見事に反映している。比率は低い

「里山」は最近脚光を浴びるようになった。愛知県の海上の森で開催が予定されている万博は、この里山を大量に破壊するとして問題になったのは記憶に新しい。農業が国を支え、薪炭が熱エネルギーの中心であった時代の代表的景観であるが、山菜や茸や栗などの山の幸と共に、心を潤す貴重な資源として見直されつつある。サンプル写真には実際に煙りが立ち上る炭焼き小屋が一点あった。

「信仰の場」は寺社が含まれるので町中の場合もあるが、里山にはたいてい水分神社があり、集落には鎮守の森が付き物であったことが示すように、もともとは豊作を祈るための場であったと考えられる。それが農耕ムラ社会の年中行事をはじめとするあらゆる行動の原点となっていたはずだ (図8~10)。

「町並景観」の中を見てみよう。「町並」が158件と64%を占める。次いで「道」の68 (30%)、「近代の景観」の12 (5.3%)となる。当然と言えば当然だが「近代」の景観は原景観としては比重が軽いといえる。「伝統的な町並み」を保存しようとの運動は昭和40年代から続けられているが、最近では各自治体が積極的に推進する例も増えて来た。「道」を石畳化するなど積極的に修景を図っているのは望ましいと言えるが、残念ながら歴史的建造物は大半が木造建築であり破壊の速度も急速なのが気掛かりである。放置しておけば全てが近代の景観になってしまうであろう (図15~17)。

3.2.3. 第2分類

さらに下位の分類へ下りてみよう。ここではそれぞれの分類の中身を更に詳細に見ることができる。

「緑」の中の最大を占めるのは「木立」の56 (28.4%)で、植生の38 (19.3%)がこれに次ぐ、以下「緑」36 (18.3%) 植栽30 (15.2%)、「樹木」24 (12.2%) 緑陰13 (6.6%)の順となる。木立は複数の樹木が立っている様を言い、緑陰は木蔭であって、夏の風物であるがサンプル写真が収集された季節をあらわしている。なお、植生は植物の地域による特性を言うので、本来は広く全ての緑が含まれる。

河川風景は「河川」の45 (46.4%)と「水辺」が44 (45.4%)と拮抗しており、これに人工の川を意

味する「水路」8 (8.2%)から成っている。水路を大分類の「自然景観」とするには迷いがあったが、人工的であれ、やはり「水」と云う自然物の存在が景観を支配していると見た (図4~7)。

「田園風景」は「集落」67 (50.4%)、「田園」48 (36.1%)、「田畑」18 (13.5%)から成り立っている。ここで目に付くのは「信仰の場」である。寺社建築はもちろん、それを取り巻く鎮守の森や参道などが、「聖なる場」として評定者の目に映じており「田園風景」とは一線を画してみた。

「集落」の中身の「農村生活」や「伝統的集形態」は「茅葺き屋根」の家々とあいまって昔ながらの風景をほうふつとさせる。「田園」のなかの「棚田」や「かかし」「あぜ道」には山間の狭隘な水田を手仕事で耕作する姿が見えるし、「休耕田」には逆に耕地整理された都市近郊の広々とした雑草畑が思い浮かぶ。

「はさ」は稲わらを現地で乾燥させるための装置で仮設のものである。その場所は「はさば」と呼ばれ、足場丸太様の部材とはしごなどを保存しておく細長い納屋が建てられていたことを思い起こさせる。

「田畑」は畑に重点があるとみて別項目としたもので水田ではない傾斜地を意味している。戦後灌漑用水などの土木工事が進んで水田が多くなり、傾斜の畑はすくなくなったが、山村出身者にとっては典型的な原景観であろう (図11~14)。

「町並み」158の内訳を見てみよう。「木造建築」の66 (41.8%)、「町並み」47 (29.7%)、「瓦屋根」30 (19%)となっている。木造建築の中身はさらに、「軸組」、「伝統的住居」等となり、白壁、格子などの伝統的な建築細部が観察されている。「町屋」は伝統的な木造建築物中でも商家が立並んでいる様を示すものと理解される。

「瓦屋根」は、多雨な日本に於て発達したもので、中でも北陸では冬期の凍結をさけるために釉薬がわらが発達した。こうした風土が生み出した日本がわらの美しさには等しく評定者の目が向けられていることがわかる。

「道」の中身は「伝統的街路」27 (39.7%)、「小

自然景観



図1



図2

人里景観

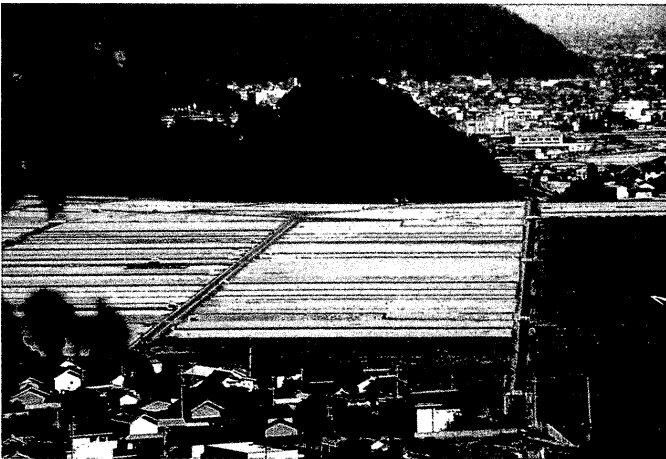


図8



図9

町並景観



図15



図16



図3



図4



図5

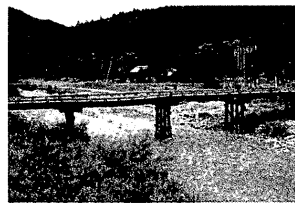


図6



図7



図10

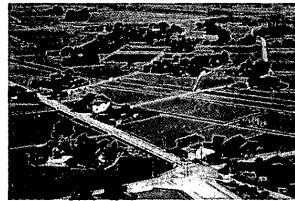


図11

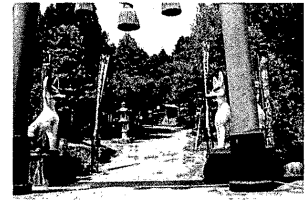


図12



図13

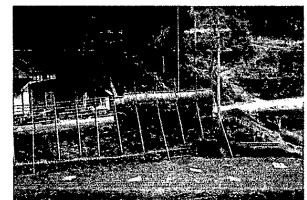


図14



図17

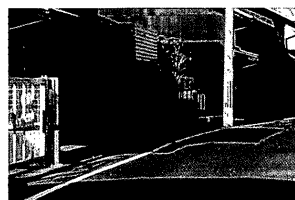


図18



図19

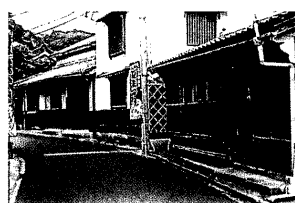


図20

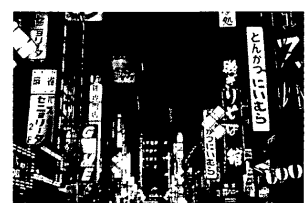


図21

道」12 (17.6%)、「道」29 (42.6%) である。「石畳」の道はもちろんだが、古い町家などが立並ぶ「伝統的街路」はそこを往来した旅人達の歴史に思いを馳せることのできる貴重なものである。今回の収集写真にはなかったが、一里塚や石の道標などはそうした気分をいやが上にも高めてくれる景観と言えるだろう。「近代の景観」は都会生まれの被験者にとっては生まれながらの故郷の景観であるのは当然として、赤ちょうちんのともる「繁華街の夜景」は、多くの現代人の原景観となっているのではあるまいか(図18~21)。

以下、第1分類については一覧表を参照されたい。

4. まとめ

126枚の写真を見て、これにキーワードを付与した5人の評定者による2000を越すワードを分類・分析した結果下記のようなことが明らかとなった。

(1) 評定者によって使用するワードの種類に大きなバラツキ(個性)が見られること。

このことは、大量の評定者からのデータ採集に際しては、標準的なワードをあらかじめ用意するSD法のような手法が適していることを意味している。但しどのようなワードを用意すべきかに関しては本研究は役立つであろう。

(2) 評定者は複数のワードを記述する際、おおまかな印象から次第に部分へと移って行っているように思われ⁶、このため、ワードの出現頻度がベストテンの後半から12~13番にかけての方がより具体的な景観因子がみられること。

(3) 大分類では「自然景観」「人里景観」で出現頻度の50%強を占め、原景観には「自然」が大きく関わっていると思われること。

(4) 第3分類(中分類)では上位から「緑」「町並み」「田園風景」「河川風景」「道」「山並」「信仰の場」「里山」「近代の景観」となり、自然を基層としながらも、農業生産や信仰の場や町並みといった人為の景観が現れてくること。

(5) 第2分類(小分類)以下では例えば「木造建

築」の「白壁」や「格子」さらに「瓦屋根」といったディテールを示す多様なワードがあり、これらは景観設計上の手がかりとなる可能性があること。

5. 結果の考察

「景観」というのはもともとは地理学の用語であったとされるが、今日のような意味で「景観」を最初に使いはじめたのは土木工学であると思われる。篠原修によれば、それは、我が国では名神高速道路以降であろうという。高速道路という歴史上かつてなかった巨大な構築物が、美しい田園風景の中や伝統的な町並みに出現するようになったことが動機であったと考えられる。

その後、景観が対象とすべき範囲は経済成長と足並みをそろえるかのように年を追って拡大し、景観とデザインの関係は時代を追って重要性をましている。

「まとめ」の(3)~(5)で示したように本研究に於て明らかになった事は、「原景観」としては工業化社会の影響があらわれる以前の景観が圧倒的に支持を得ているということである。

また、これとは対照的に、日本的な醜悪な景観との批判を浴びることの多い、猥雑でありふれた都市風景もまた、人によっては既に「原景観」と捉えられていることも見逃す訳には行かない。

今後の詳細な分析と共に早急な対策の必要性を感じさせるものとしては、一見伝統的などかな風景の中にしのびよりつつある、原景観崩壊あるいは変質要因の存在がある。

例えば図11の写真では、散居村の家屋群の片隅に赤がわらの家群がみられるが、この平野の景観の先行きを予兆していると思われる。

また、日本昔語りにでて来そうなわらぶき屋根の家も、良く見てみると、藁ではなく金属板葺きが多い。このような形が増えつづけることは、やがてこうした屋根こそが「原景観」であることになってしまうのは時間の問題であると思われること、などである。これらは地域ごとの詳細な検討が今後は必要であることを示唆している。

なお、キーワード同士の組み合わせ、すなわちどのような取り合わせが「原景観」として認知されやすいのかは、未分析のままであるが、今後、統計手法による分析が必要と考えられる。

6. おわりに

最近ではそれぞれの専門分野で特化した景観の研究がなされるようになった。例えば色彩景観、緑地景観、水辺景観、里山景観といったものである。これらは問題の所在をどこに置くかで切り口を異にするものである。例えば、色彩景観が殊更に取り上げられるようになった背景には都市景観の荒廃の一因を色彩が担っているとの認識がある。

かつて、自然素材によって建築物が出来ていた時代には考えられなかった多様な色彩が、工業材料の進展とともに景観要素の中に入り込み、伝統的な景観に破たんを来している例は枚挙に暇がない。1981年には東京都バスの色彩が問題となったように、それは建造物にとどまらないところが特徴である。

緑地景観や水辺景観に関心が高まっているのは、地球環境の悪化とともに、世界的に自然保護に対する関心が高まっていることと連動しているが、「日本では都市文明の最高度の形態が自然を指向する」と見るオギュスタン・ベルクの指摘⁷が含蓄深い。なお、デザインの対象としては、従来の公園や建築の外回りの空間（外構）に加えて、街路空間や、ウォーターフロント（水辺空間）、道の駅など新しい概念の計画緑地が増えつつある。里山景観はそうした計画されたエリアを離れた、やや広域の都市近郊の景観に対して使われるが、それは単なるアメニティーとしての緑陰や美観をこえて、生産や信仰の場など多様な土地利用がなされてきた景観である。そこに日本独特の田園美があったとする考え方であり、桂離宮や後楽園など、貴族や武家のための庭園にもその要素が取り込まれてきたことに思い当たる。農水省は最近になってこうした生産風景を日本固有の文化の一つとみなして、その保存活用に力をいれはじめている。⁸

本研究は未だ、荒いデッサンを開始したばかりの状況であるが、垣間見える前途には景観デザイン論を超えて現代日本を取り巻く多様な文化・文明論が横たわっていそうである。引き続き資料の解析を急がねばならない。

最後に、研究者及び協力者の方々、そして研究費を提供された当局に対し心より感謝申し上げる。

注・参考文献

- 1 兵庫県の「環境の保全と創造に関する条例」第2条
- 2 進士五十八他「風景デザイン—感性とボランティアのまちづくり」1999など
- 3 篠原修編 景観用語辞典 1998
- 4 天野光一 前掲書 pp28-29
- 5 芦原義信 続・町並みの美学 1990
- 6 研究者の福田氏からはワードを記入したMOの返送時に次のようなコメントをいただいている。
「1. は空間・環境、2. 3. は部分、4. 5. は詳細という順を原則としたが、4. 5. には必ずしも原風景的に有効なものばかりでなく、問題になるようなものを抽出している場合がある。平均的には、2. 3. あたりに原風景を探るヒントがあるようだ。」
- 7 オギュスタン・ベルク「日本の風景・西欧の景観そして造景の時代」1990
- 8 「農村生活環境博物館構想」による事業が全国で行われている。

表7. 研究者・協力者一覧（順不同）

氏名	所属	専門分野
・研究者		
山岸政雄	金沢美術工芸大学	視覚デザイン
太田昌子	同 上	日本美術史
坂本英之	同 上	環境デザイン
角谷 修	同 上	同 上
林 進	岐阜大学農学部	緑地環境デザイン
中嶋猛夫	女子美術大学	環境デザイン
福田 肅	大阪芸術大学	同 上
山口繁雄	大阪市立工芸高校	建築設計
伊藤真市	宮城大学事業構想学部	環境デザイン
浅井 宏	東筑紫短期大学	絵画
藪内朋子	富山美術工芸専門学校	地域計画
・協力者		
畑山良子	金沢美術工芸大学	建築設計
野溝 茂	宮城大学事業構想学部	環境デザイン
橋本洋子	仁愛女子短期大学	視覚デザイン

（くろかわ・たけと 環境デザイン）
（平成12年10月27日受理）